

仏暦 2551(2008)年

ひだご坊

No.223 (2)

定例法座・法話(午後一時から)
二月十一日 平野一成氏
二十七日 輪番
一十八日 森三智丸氏
三月一日 三島大遵氏
十一日 輪番
十三日 藤守頌章氏

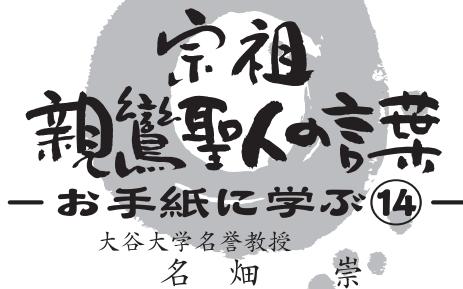
「道」をたずねて遠くまで来てしまつたようです。しかし道は遠くにではなく、近くにありました。私たちがいましたところが道なのです。そこに「念佛の道」が開けるのです。仏道は遠くて高く、ひとりでゆく困難さは思ひもおびません。しかし仏の願いにより、私たちは念佛ひとつにより容易に仏道に立ち、かならず往生をとげ成仏するのです。念佛こそ「易行道」であり、世間にありながら、念佛により現に仏道が成就すると教えてあります。

ここまで遠まわりして「道」をたずねてきたのは、私自らぬきさしならぬ状況に身をさだめ、あらためて仏道を確かめ、決断をうながしてみたのです。それでなお「念佛の道」に承服できず、不審や疑いをいだく自分がいるとすれば、その者は生死をものともせぬ超人か、善をきわめた至徳の人か、際限もなく欲望の充足を求めつづける、傲慢不遜の人間か、自分をみつめて恥じも畏れもなく一生をむなしに過ぎる「邪見驕慢の悪衆生」です。

浄土真宗の教えにあとうと言いますが、「念佛往生の道」を疑い、厭い、恥み、避けた私がいませんか。その深刻な状況を譬へ話にして教え、決断をうながすのが「二河の譬え」でしょう。世間はもとより虚偽に満ち、望みは果てなく、愛や憎しみは尽きません。現代はそれが極端な状況になり、テレビやインターネットにより、映像化された情報が増幅され、過度に伝わります。それを受信する脳は限界をこえ、情報の「過食」「過多」になり、ミゾが生じるといわれます。

そうとも気づかず、数値化された効率だけを追い、収益と健康と人気を競うとしたら、現代にはもう生きていはず、空漠とした荒野が砂漠のように広がるなか、闇に死者の無念のうめきを聞くようなものです。

善導大師の「二河の譬え」は、旅人がひとり荒野を西に向かつて行く情景

大谷大学名誉教授
名畑 崇

道は近くに立つところが道なのです。そこに「念佛の道」が開けるのです。仏道は遠くて高く、ひとりでゆく困難さは思ひもおびません。しかし仏の願いにより、私たちは念佛ひとつにより容易に仏道に立ち、かならず往生をとげ成仏するのです。念佛こそ「易行道」であり、世間にありながら、念佛により現に仏道が成就すると教えてあります。

ここまで遠まわりして「道」をたずねてきたのは、私自らぬきさしならぬ状況に身をさだめ、あらためて仏道を確かめ、決断をうながしてみたのです。それでなお「念佛の道」に承服できず、不審や疑いをいだく自分がいるとすれば、その者は生死をものともせぬ超人か、善をきわめた至徳の人か、際限もなく欲望の充足を求めつづける、傲慢不遜の人間か、自分をみつめて恥じも畏れもなく一生をむなしに過ぎる「邪見驕慢の悪衆生」です。

浄土真宗の教えにあとうと言いますが、「念佛往生の道」を疑い、厭い、恥み、避けた私がいませんか。その深刻な状況を譬へ話にして教え、決断をうながすのが「二河の譬え」でしょう。世間はもとより虚偽に満ち、望みは果てなく、愛や憎しみは尽きません。現代はそれが極端な状況になり、テレビやインターネットにより、映像化された情報が増幅され、過度に伝わります。それを受信する脳は限界をこえ、情報の「過食」「過多」になり、ミゾが生じるといわれます。

善導大師の「二河の譬え」は、旅人がひとり荒野を西に向かつて行く情景

からはじまります。行く手に大河が横たわり、上手は底知れぬ欲望の河、下手は燃えかかる怒りの河。うしろ岸から武器を手にした人殺しや、飢えた野獸がせまる。恐怖きわまる旅人の足もとに、一筋の白い道がさしかかり、水火二河の間をつらぬいて西の岸辺に達している。細くて白い筋道は、旅人の眼には危なげで歩を踏みだせない。「もう、ためらつている場面ではない」旅人がそう決意したとき、こちらの岸辺から釈尊の声がする。

「きみ、決断してこの道をたずねて行け。けつして死ぬことはない。もし立ち止まれば、かならず死ぬ。」

京都への旅に出発した覚信房がいくばかりもない所で発病して、同行の者が引き返すようにすめます。しかし覚信房が親鸞聖人にあうため、決断して京へのぼる道に迷いはありません。

死するほどのことならば、かえるとも死し、とどまるとも死し候わんす。また、やまいはやみ候わば、かえるともやみ、とどまるともやみ候わんす。おなじくは、みもとにてこそおわり候わばおわり候わめとぞんじて、まいりて候うなり。

(聖典 五八七頁)

意訳「死ぬというほどの事なら、引き返しても死ぬ。またここに止まつても死ぬ。病気になるという事なら、引き返しても死ぬ。また止まつても病む。同じことなら、このさき京都まで行き、親鸞聖人のお側でこそ、いのち終わるなら終わりたい。そう思つて、ここまでやつてまいりました」

こうして、覚信房は上洛して聖人と面談をとげ、そのまま京都に滞在して、聖人にみとられ、念佛して往生をとげました。この覚信房の決断を、親鸞聖人は善導大師の「二河の譬え」のころだと、感嘆しておられます。

覚信房は声に出して常に念佛していなかった。「なむあみだぶつ」と念佛するとき、声に出すか出さないか。声にしないで「なむあみだぶつ」「なむあみだぶつ」、「南無阿弥陀仏」、「南無阿彌陀仏」とには「南無不可思議光如來」と念じて、念佛を発する声と心がひとつ合わせになりました。この覚信房の決断を、院本堂において法要と総会は嘉念坊善俊上人の顕彰会で、飛騨における真宗の祖、嘉念坊善俊上人の祥月命日にあたる三月三日、高山別院本堂において法要と総会

期日 ②二月二十六日(火)
会場 高山教務所
講師 三木彰円氏
内容 「教行信証総序に学ぶ」
期日 ③三月三日(月)
会場 別院本堂
講演 午後二時半から
時間 午後一時半から
講師 田中彰氏
内容 「嘉念坊善俊上人法要並びに顕彰会総会」
期日 ③三月二十五日(火)
会場 別院本堂
講演 (高山市郷土館長) 午後一時半から
時間 午後二時半から
講師 五辻文昭氏
内容 「蓮如忌法要」

覚信房の決断

聖教学習会

を行います。

総会後、講演会を行いますので、会員以外の方もご聴講ください。(無料)

第7回 真宗大谷派ハンセン病問題全国交流集会
「人間に帰ろう」~高山で出会う私のハンセン病問題~

3月5日 午後1時~ 記念講演 講師:神美知宏氏
午後3時~ 分科会 はじめて出会うハンセン病問題
ハンセン病療養所将来構想問題
真宗大谷派とハンセン病問題



3月6日 午前9時~ 追弔法要・集会宣言採択など

会場: 高山別院

お問い合わせ先: 高山教務所 (0577-32-0776)

主催 真宗大谷派解放運動推進本部・真宗大谷派高山教区

ハンセン病って何? その③ ~ハンセン病問題と現在の課題~

- Q ハンセン病回復者の方たちは、どのような差別を受けたのですか?
- A 「無らい県運動」によって、地域内にハンセン病と思われる人がいると、親しかった隣人も寄りつかなくなり、密告によって保健所の職員や警察官が強制的に療養所に収容しました。しかし療養所では充分な治療も行なわれず、入所者には労働が課せられました。療養所からの外出は許されず、抵抗するものには療養所内に立てられた監房に入れられ、厳しい罰を受けました。
- また、入所者は妊娠・出産が認められず、療養所内で結婚する場合は、男性は断種手術が強制されました。妊娠した場合は、強制的に墮胎手術が行なわれました。その墮胎された胎児がホルマリンに浸けられた状態で115体発見されています。
- Q 2001年の国の違憲判決で問題は解決したのですか?
- A 全国にある療養所には、現在も約2800名の方が生活されていて、いまだに故郷に帰れない方がたくさんおられます。また、療養所を退所しても、本名を名のれない方、ハンセン病の元患者であることを隠して生活しなければならない方がおられます。
- 先述の「胎児標本」の問題については、政府は明確な謝罪をしないまま、「慰靈」というかたちで決着をつけようとしています。
- また、ハンセン病療養所の将来構想問題があります。入所者には今後の医療や介護についての深刻な不安があります。隔離政策に苦しめられてきた入所者が、その晩年を社会から切り離されることなく、たとえ「最後の一人」になるときが来るとしても、社会の中で生活するのと遜色(そんしょく)ない生活及び医療が保障され、安心して暮らすことができる療養所を実現しなければなりません。しかし、そのための法律は整備されておらず、現在、署名運動が展開されています。

別院彼岸会・永代経法要

- 3月17日~23日 午後1時から
- 17日(月) 窪田 哲氏(圓徳寺住職)
18日(火) 岩佐 幾代氏(淨永寺坊守)
19日(水) 歸雲 真智氏(還来寺住職)
20日(木) 橋本 朝陽 高山別院輪番
21日(金) 四衢 亮氏(不遠寺住職)
22日(土) 江馬 雅人氏(賢誓寺住職)
23日(日) 三島 多聞氏(真蓮寺住職)

仏暦2551(2008)年

ひだご坊

No.223 (1)

お電話
0577-342313一月二十一日~二十九日
北條良樹氏三月一日~十日
旭野康裕氏三月十一日~二十日
廣田令寿氏

「高山教区 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌テーマ」決定!!

今、いのちがあなたを生きている
 雜行を棄てて本願に帰す
 このままでいいのか、今の世・この私

2011年に宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌をお迎えするにあたり、真宗大谷派では、「今、いのちがあなたを生きている」というテーマが打ち出されています。

このテーマの「いのち」とは、人類の歴史を貫いて誰の底にも流れている深い願い、「私は何のために生まれてきたのか」「どこに向かって生きているのか」といった、私の根源から湧き出てくる「問い合わせ」なのでしょう。

飛騨の地に生きる私たちには、この「いのち」というテーマを、さらに親鸞聖人自身の言葉にたずねることにしました。

それは、親鸞聖人が29歳のときに、師・法然上人に出逢った感動をはっきりと表した言葉、「雑行を棄てて本願に帰す」であります。

思えば私たち人類の歴史は、より豊かな暮らし、より正しい社会、そしてより進歩した文明を求めての限りない歩みがありました。しかしその歩みは、往々にして逆に一人ひとりの人間を追い詰め、時に殺戮してしまうものではなかつたでしょうか。

現代の日本においても、老いも若きも、誰もが不平と不満をいだきながら、いつもいらいらし、不安にさいなまれています。ついには、「人として生まれた意義と生きる喜び」を見出せないまま、9年連続しての3万人を超える自死者と、毎日のように報道される他殺者とを生み出しつづけています。

こうした現代日本を生きる私たちに、親鸞聖人は、私た

ちが「正しい」と信じて行ってきたことの、その全てが「雑行」ではないかと教えられます。そして、「雑行」と知らせるはたらきが「如来の本願」なのです。人類の歴史の上にたえず繰り返されてきた、止むことのない闘争・戦争・差別・いじめ…、それらは決して私と無関係ではなく、この私のあり方が生み出します。この自覚を私たちにうながすはたらきが本願であり、その呼びかけに気づくことが本願との出合いなのでしょう。

「雑行を棄てて本願に帰す」という親鸞聖人の決断は、決して自分が思い描いた理想を実現したというような、到達点を表す言葉ではありません。如来の本願から問われ続け、新しく歩みを踏み出す転換点の言葉です。同時に、今の世を生きる私たちに、「雑行を棄てて本願に帰せよ」と願い続ける親鸞聖人の呼びかけであります。

私たちは、如来から、そして親鸞聖人から、「今までいいのか」と問われ続けています。その問い合わせの前に身を据え、「このままでいいのか、今の世・この私」という内から湧いてくる共なる問い合わせを大切にして、聖人の御遠忌をお迎えしてまいりたいと思います。



発行 真宗大谷派高山教務所
 発行者 橋本朝陽
 〒506-0857 高山市鉄砲町6
 ☎ 0577-32-0776
 *毎月20日発行 50,300部
 三市一郡無料配布
 印刷 山都印刷株式会社

真宗大谷派高山教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌お待ち受け大会 開催要項

1 期 日 2008年5月18日(日)

2 会 場 高山別院本堂・御坊会館

3 申込み お手次の寺院までお申込ください。

4 帰 敬 式 お手次の寺院までお申込ください。

5 交通手段 各地域から別院までの団参バスを運行いたします。

6 持 物 念珠・勤行本

7 問 合 先 真宗大谷派高山教務所
 (0577-32-0776)

主催:高山教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌推進委員会

目 程

【午前10時から】

帰敬式 執行者: 大谷暢顕 門首

【午後1時半から】

開 会

勤 行

教区御遠忌テーマ趣旨説明

門首挨拶

内局挨拶

『教行信証』影印本贈呈

意見発表

記念講演

講師: 真城義磨 氏

(大谷中・高等学校校長)

閉 会